

No. 71

2019.4

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
小川洋子（小説家）



『動という名の静(死)サイボーグ009』 ©石森プロ

どこでも文学館活動報告

2019年度企画展紹介

館長の作家対談

ゲスト
小川洋子
(小説家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

『博士の愛した数式』『ミーナの行進』、『ことり』など、話題作を次々と発表してきた小説家の小川洋子さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

デビューの頃

菅野▼最初につかぬことを伺いますが、小川さんは本名ですか？

小川▼そうです。

菅野▼実は小学校の低学年ぐらいの頃、同じクラスに小川さんと同姓同名の子がいたんですよ。

小川▼あら、そうですか。

菅野▼なので、小川さんが「海燕^{かいえん}」に登場されたとき、ことによるとあの時の子かなと、一瞬脳裏をよぎったんです。どういうわけか、その同級生の名前をはつきりと記憶していたんですね。

小川▼それを伺うと、私まで嬉しい気持ちになります。何か印象に残る方だったんでしょうか。

菅野▼そういうこともないと思いますが、とにかくそんなことを思った記憶があるんですね。「海燕」というと、編集長の寺田博さんとは旧知の仲だったので、当時、何となく読者モニターみたいにされていたんですよ。それで「おまえも読ん

でくれ」なんて言われてね。そういうわけで、小川さんの作品は割と最初の頃から拝見していました。

小川▼お恥ずかしい限りです。

菅野▼そして新人賞(海燕新人文学賞)を取られましたね。小川さんの前後の受賞者というとなががいらつしやいますか？

小川▼私のすぐ前年が吉本ばなさんですね。それから、第1回目が干刈^{のしかり}あがたさんでした。

菅野▼早くに亡くなられた。

小川▼そうですね。

菅野▼女性ばかりですか？

小川▼女性が多かった印象はありますね。私の後が角田光代さんです。

菅野▼角田さんも「海燕」の新人賞ですか。じゃあ、ある年代の作家は、大体みんな関係していたわけですね。

小川▼そうですね、私も小説を書いていてどの文芸誌の新人賞に応募しようかと考えたときに、「海燕」が一番、新人を育てるのに熱心なんじゃないかなと思ったんです。

菅野▼実際そうですね。寺田さんは「文藝」の編集部にいたころ、坂本一亀^{かず}さんに鍛えられて、あ

生と死の境界

菅野▼小川さんの初期の作品は、「完璧な病室」は弟さんが白血病で、「揚羽蝶が壊れる時」は、認知症が進むお祖母さんとの話ですね。生が壊れていく過程をたどりながら、生と死の境界とはどういうことなのか、そういう問題に関心をお持ちだったのではないかと思います。いかがでしょう。

小川▼おっしゃるとおりで、生きている現実の世界と、岸の向こう側の中間地点を描きたいという気持ちがあるかもしれません。その次に『葉指の標本』を書くんですけれど、標本という、本来なら死の世界へ行くべきものを、人間の都合でこちらの世界に留めおく、そういうものを題材にしたリ、とにかく初期は境界線というのが一つのキーワードでした。

菅野▼それから、初期の作品と少し変わってきたという印象を受けたのは、読み違えているかもしれませんけど、『やさしい訴え』。あれはいつごろですか？

小川▼デビューして、「海燕」の庇護のもとを旅立って間ない頃でしょうか。「海燕」も廃刊になりま

した。

菅野▼「やさしい訴え」というのはラモーの曲から？

小川▼ええ、そうです。

菅野▼僕はあの邦題はあまり良い訳語ではないと思うんですけどね(笑)。

小川▼フランス語のニュアンスとは異なりますか？

菅野▼原題のTendres Plantesは名詞のほうに、「悲しい訴え」とか、嘆きとか、そういう悲哀の感触があるんですね。しかしあの小説の場合は、かえって「やさしい訴え」の方が相応しかったかもしれませんね。小川さんの小説の特徴の一つは、文章が明晰で抑制がとれていて、端正な点にあると思いますが、あの作品の中で嫉妬にかられる女性という、生々しい場面を描く際に、そうした文章の質とマッチさせるのが難しかったんじゃないかなという感想を持ちました。

小川▼「やさしい訴え」は私にとって転換点になった作品で、実は初めて小説のために取材をしたんです。

菅野▼チェンバロの取材ですか？

小川▼そうです。チェンバロを作っている職人さんの工房を取材しました。

菅野▼チェンバロのことは詳しくあったんですか？

小川▼いえ、全然詳しくなかったんですけど、蔵王に取材に行きまして。そして実は、あの小説に描いた風景というのは、現実のありのままなんです。私は何も余計なことをしていないんです。そこに、小説家が作った瑠璃子という女を1人放り込んでみただけであって、私としてはただ現実を描写したという感

小川洋子(おがわ・ようこ)

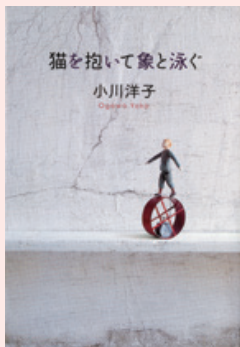
小説家。1962年岡山県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。88年「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。91年「妊娠カレンダー」で芥川賞を受賞。2004年『博士の愛した数式』で読売文学賞、本屋大賞、同年『ブラフマンの埋葬』で泉鏡花文学賞、06年『ミーナの行進』で谷崎潤一郎賞、13年『ことり』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。他に小説、随筆多数。近著に『琥珀のまたたき』、『不時着する流星たち』、『口笛の上手な白雪姫』など。



『完璧な病室』
1989年
福武書店



『博士の愛した数式』
2003年
新潮社



『猫を抱いて象と泳ぐ』
2009年
文藝春秋



『やさしい訴え』
1996年
文藝春秋



『ミーナの手紙』
2006年
中央公論新社



『人質の朗読会』
2011年
中央公論新社

覚なんです。そこで嫉妬が起こるのは、結果そうなっただけで。流れている音楽とか、工房にあるいろいろな道具の散らばり方とか、木のおいとか、森の様々な音とか、そういうものをただひたすら描写していった小説なんです。

菅野▼ただ、それを表現するにしても、小川さんの文章力ですよ。雑な文章で書いたら全然さまになりませんか。

小川▼そうですね、単なるメロドラマにしないために。でも文章力というのは何か、才能というよりも……

菅野▼天性の資質かな？

小川▼執念と言いますか、これでいいかなあというふうに諦めないで、もっともつと練るという。そういう執念深さじゃないかなと、いつも思うんです。

菅野▼推敲はなさるほうですか？

小川▼そこが寺田さんに鍛えられたところで、書きながらも、何度も直します。

菅野▼これだけ作品を書いておられるんだから、決して遅筆ではないですよ。

小川▼いえいえ、ものすごく遅いんです。

菅野▼そうですか？

小川▼ええ、小説を書いているというより、ただじっとしている時間の方が長いですね。どうするべきかと考えている時間の方が。

小さな声

菅野▼チェンバロづくりもそうですが、小川さんの小説は隠れた場所、あまりたくさんの人が群がらないような仕事に取り組む人物を題材にすることが多いですね。

小川▼おっしゃるとおりです(笑)。

菅野▼チェスの名人とか、小鳥を飼うおじさんとか、それから……

小川▼数学者とか(笑)。

菅野▼それはやはり、そういうタイプの人間に関心をお持ちだということですよ。



小川▼これで書けるという、予感を感じさせてくれる何かとの出会いが、作家それぞれにあると思うんですけど、私の場合は人知れず、名声も求めず、小さな声しか出せない人と出会ったときに、書きたい気持ちになるんですね。

菅野▼それは野暮な言い方をすると、小川さんの人生観とか、世界観とか、そういうものと結びついているようなところはおありですか？

小川▼それはあるかもしれないですね。自分の意識できないところまで深く降りていったところに響き合う相手がい んでしょ うね。

菅野▼小鳥のおじさんにしても、博士にしても、社会の片隅で隔絶されたところにいるわけですね。そういう場所から、それでもどこかで社会とつながりを持つ。小鳥のおじさんの場合は幼稚園の子供なんかとつながったりするんでしょ うけど。そういうことも意識しておられるわけですね。

小川▼そうですね。小鳥を大事に飼っていた兄弟がいたということを書き残しておくこと自体が、もうその小説の役目みたいになつてきて、こういう人が生きていたんですと、私が小説に書かなければ埋もれたまま誰も気がつかない、そういう人のために小説ってあるのかなと、だんだん思うようになりましてね。大きな声で、道の真ん中で発言できる人のことは、べつに小説に書かなくても、何かのかたちで声が届くでしょうし。

小説家の性^ぶ

菅野▼『ミーナの行進』は芦屋のお嬢さんの話でしたけど、ああいう恵まれた家庭を舞台にした小説は、あまり書いていらつしやらないでしょう。

小川▼あれもまた初めての体験だったんですが、読売新聞の日曜版で毎週連載することになって、そういう

の編集長は最初疑っていましたが。「数学で書きたいんです」と言ったら、「えっ！ 数学ですか？」と。当時の編集長の非常に心配そうな顔が忘れられません(笑)。

普通の人々もみんな物語を持っている

菅野▼割に最近、小川さんの小説がちょっと変わったなと感じたのは、『人質の朗読会』ですね。あれはテーマそのものが、小川さんの今までの系列と違って。

小川▼違いますね。

菅野▼あれはどういうきっかけだったんですか？

小川▼短編の連載をする事になったんですが、何かちよつと仕掛けがほしいなと思いました。ですから、どこかで人質になったという仕掛け自体にはあまり意味がない小説なんです。ただ、そういう極限状態に陥った人が自分の人生を振り返って、何か一つお話をするとしたらどういうことを話さだろうかと想像しました。そして、それは何か劇的な出来事ではなくて、今まで誰にも話していなかったけど、こんな忘れがたい思い出があります、というような話ではないかなと考えたんです。

菅野▼人それぞれにそういう物語を持っているという事です。菅野▼人それぞれにそういう物語を持っているという事です。菅野▼ああいう事件が実際にあつて、それがモチーフになつてゐるわけではない、ということですね。**小川**▼そういうわけではないですね。いわゆる普通の人々もみんな物語を持っているということ

場が与えられると、こちらとしてもちよつと新たな方向に行つてみたいなのという気持ちになるんですね。

菅野▼媒体の性質にもよるといふことですね。

小川▼そうですね。たまたまそのとき芦屋に引越したばかりで、何となく歩いていると、どんなでもないお屋敷がありまして、一体この中ではどんな人が暮らしているんだろうと思つたのが最初です。

菅野▼カバを飼っているなんていうのは面白い発想ですね。小動物園だったとかね。

小川▼しかしそれも私が想像したわけではなくて、実際に昔、薬品会社の社長さんが庭に私設動物園を設けていたそうなんです。芦屋の市政便りの中の小さいコラムで見つけまして、もう、これだと。偶然に手助けしてもらわないと、小説は書けないですね。



書きたかったということです。

菅野▼それぞれに違った人生を背負っているとして、それらを一つにまとめる時、個々の物語をつなぐ何かがないとまとまらないと思いますが、そういう難しさはありませんでしたか？

小川▼そうですね。連載していた時も8回か9回で私としては終わりにするつもりだったんですけど、編集者からもう1回やつてくれと言われまして、そうだと、人質たちが残した録音を聞いている兵士にも語らせようと思い、特別付録編のようにして最終回にしました。そういう、外的な偶然によつて閉じるということを経験しました。

菅野▼ゲリラの人質になって政府軍が攻めてくるわけですけど、どこかの国を想定していらつしやつたんですか。

小川▼いえ、特定の国はないです。ただ私が幼いころ、ものを書くということをはじめて意識したの

菅野▼バルザックが「偶然こそ最大の小説家である」と言ってますけどね。そういうことは確かにあるんだけど、しかしそれをつかまえるのは小説家の才能^ぶですね。

小川▼小説家の性^ぶと言いますかね。余計なことをいろいろ考えちゃつて。そこまで至ると、ある意味、もう勝手に小説が生まれてくるという感じですね。ですから、あれは毎週15枚程度の締め切りだったんですけど、次の週、どうしようって思い悩むことがあまりなかったんですね。よく言われるように、あの中で子どもたちが本当に明るく、勝手にやつてくれました。私はその後をただ追いかけただけです。

言葉を発していない人々を言葉で描写する

菅野▼それからあの小説で、ミュンヘンオリンピックのバレーボールの話がかなり長く出てきますよね。小川さんはどちらかといえば穏やかなタイプの作家だと思いますが、ああいう題材をあんなだけ長く書くというのは、相当大胆なことだなと思つた覚えがありますけど。上手に使われたね。

小川▼スポーツが大好きなんです。バレーボールがどういふスポーツか、おばあさんに一生懸命実演して説明するというシーンなんですけれど、1972年のミュンヘンオリンピックが、私にとつて最初に熱中したオリンピックだったんです。

菅野▼ミュンヘンは、反イスラエルのテロがありましたね。

小川▼大きなテロがあつて大問題になった年でした。多くの人が殺されてしまつてね。あるいは、川端康成が自殺した年でもあつて、振り返つてみると結構いろいろ重要なことが起こつ

が『アンネの日記』だったんです。12、3歳の頃に読んで、非常に心打れた文学的な最初の体験でした。閉じ込められた中であれだけの日記を、文学を生み出したということが、何か私の出発点にあるような気がします。閉じ込められている人、そこから出られない、あるいは出たくない、そういう人々に引き寄せられて書いているなと、自分が書いてきたものを振り返つてみると感じます。

小説的なものの魅力

菅野▼デパートの屋上から出られなくなつた象がその典型ですね。

小川▼『猫を抱いて象と泳ぐ』。

菅野▼あの作品は主人公の少年が成長を止めてしまふわけですね。ギンター・グラスの『ブリキの太鼓』を思い出しました。

小川▼『ブリキの太鼓』は大きなヒントになりました。先ほどの話にも通じますが、閉じ込められている、あるいは大きくなれない、成長できない、そうした点も共通していますね。チェスという、四角い8×8の中に閉じこもっているような状態ですよ。しかし、そういう境界線をはっきりした癖の中にずつと閉じこもっているからこそ、彼らだけが見つけられる宇宙との通路があつて、それを発見できる。そこにこそ、小説的なものの魅力があるという気がしますね。

菅野▼それから、あの小説で印象的だったのは、チェスを教え込む元バスの運転手が象みたいに太つちやつてね。

小川▼出られなくなつて。それも閉じ込めですね(笑)。

菅野▼しかし、坊やに一生懸命チェスを教える姿が、童心を失わないといえますか、人間として純粹で無垢なものなんです。『博士』にしてもそ

ている年なんです。

菅野▼浅間山荘事件とか。要するに、いわゆる過激派が崩壊していく傾向があらわれたり……

小川▼そういう時代でしたね。パンダが初めて来たりとかですね。古い新聞を調べていると、小説の素材の宝庫という年で。私が嬉しかったのは、あのバレーボールの場面で、森田だ、猫田だ、大古だというのが出てくる部分を書いたらすぐ、松平監督からお電話をいただきました。ものすごく喜んでくださった。

菅野▼小説にあれだけ実際のゲームが取り込まれているのは初めての経験だろうから、監督は嬉しかったでしょうね。

小川▼バレーボールのようなスポーツにしても、あるいは音楽にしても、言葉を使つてやりとりしないんですよ。チェスもそうですけど。そうした言葉を発していない人々を言葉で描写していくと、思いがけないものが生まれますね。ですから『博士の愛した数式』で、あれは野球を二生懸命書いたんですけど、作家の意図を超えたものと出会えました。

菅野▼前々から野球については関心があつたわけですね。

小川▼野球を見るのは好きで、阪神のファンですが、題材にするつもりは全くなかつたんです。とにかく数学者を描くということいろいろ調べていくと、28が完全数だと知りました。あら、江夏の背番号じゃないかと。

菅野▼それに気がついたのは……

小川▼偶然ですね。野球は数字で表現されるスポーツですので、数学と野球をくつつけたらルート君との会話も弾む。これは野球が必要だというふうになりました。

菅野▼数というものには関心を持っておられたんですか？

小川▼学生時代、数学は苦手でした。ただ、数学は素人でも面白い要素がいろいろ含まれていて、絶対小説になるという確信がありました。『新潮』

うですね。

小川▼数学を教えるというね。

菅野▼チェンパロ作りにしてもそうだけど、僕ら男の読者は、この男はなぜこんなことをやるんだろう、なぜこんなふうに生きていけるんだろうと、考えさせられるところがあるんですね。小川さんは、あまり深く男の心理をお書きにならないですよ。

小川▼確かに、私が女性であるということ、男の人に対する神秘みたいなものや、こうあつてほしいという願望があるのかもしれない。それは特に、少年に対してありますね。自分の昔の体験から、少女のことは分かり過ぎてしまふという難点がありまして、少年が持っている永遠の謎が、やはり書きたい対象なんですね。

菅野▼時代によつて少年の成長の仕方も違いますし、近ごろの少年はませていて、変に大人びているから書きにくいかもしれませんね。

小川▼私が男の子を一人育てたということもあるかと思うんですけどね。男の子に対する愛おしい気持ち、が、すごくあるんです。

菅野▼それは伝わってきますよね、確かに。

小川▼そうやって、だんだん自分がこの年になってくると、人類愛みたいなものを感じます。何を考えているんだろうというようなお役人や政治家が出てきても、全否定できないというか。この人だつて昔は子どもだったんだな、お母さんのおっぱいを吸っていたんだなと思うと、もう許せるという感じになつてきましたね(笑)。

菅野▼それはさつき問題になつた題名に結びつきますね。

小川▼『やさしい訴え』になつてきたんでしょ うか(笑)。

(2019年1月23日、世田谷文学館館長室にて)

*坂本一亀(1921〜2002)

河出書房の編集者として三島由紀夫『仮面の告白』、野間宏『真空地帯』、高橋和巳『悲の器』など、戦後日本文学を代表する数々の名作を世に送り出し、1962年から64年まで雑誌『文藝』の編集長を務めた。

どこでも文学館 出張展示バナー

世田谷文学館の普及事業とは？

世田谷文学館では、「移動文学館」として1999年度より、気軽に文学作品や作家に親しんでいただくことを目的に、文学館の外へ出かけての出張展示事業を行ってきました。現在は、「どこでも文学館」と名称を変え、主に区内の学校や公共施設、群馬県川場村（世田谷区健康村）に向いての出張展示を行っています。また、区内施設にて出張ワークショップを行うなど、「どこでも」文学に触れ合うことができる普及事業を展開しています。



2018年度実施ワークショップ「ことばとからだ」

「セタブン人生相談」のご紹介

出張展示事業では、これまでにショートショートの神様と言われたSF作家の星新一や、『どくとるマンボウ昆虫記』で知られる北杜夫、幅広い世代に愛される詩人、宮沢賢治など、さまざまな文学者をテーマとしたバナーを制作してきました。本年度は、世田谷ゆかりの作家をテーマに、「セタブン人生相談」—あなたのための人生処方箋—を制作しました。

世田谷文学館では、開館以来、地域ゆかりの作家や作品について、調査研究を重ね、展覧会や講演会など様々な企画を開催してまいりました。本バナーでは、そんな世田谷ゆかりの作家たちの名言や名著を「人生の処方箋」ととらえ、悩んだときや、背中を押して欲しいときの「心のお薬」としてご紹介します。

『あなたにぴったりの処方箋、
お出しします』

病気になったら病院へ行き、薬をもらってゆっくり休む。そんなふうに身体に休息を与えますよね。じゃあ心は？ 仕事や勉強、人間関係に疲れたとき、どうしても回復できるのでしよう。そのヒントがこのバナーに隠されています。名前は聞いたことがあるけれど、作品はよく知らない！ そんな作品・作家にたどり着いたらそれはチャンス！ 様々な質問から導き出された、自分では選ばない「心のお薬」との出会いかもしれません。さあ、どんな作家・詩・言葉に出会えるのでしょうか。用法・用量を守って楽しくお読みください。

『人生処方箋の取得方法』

1枚目のチャートには「旅行に行くなら？」や「仲間がピンチ！ あなたはどうする？」など、

様々な質問が書かれています。時には答えに迷うことも。そんな二択式の質問に直感で答えながら選択肢に沿って進めると…？

「仕事」の寺山修司や、「友達」の林芙美子のほか、「恋」の宇野千代、「夢」には萩原朔太郎、「家



チャート式の質問に答えています。



「セタブン人生相談」バナー 1階コレクション展での展示の様子

族」に田部井淳子、「趣味」では徳富蘆花など、世田谷ゆかりの6人の作家を人生における悩みやヒントに対する「処方作家」としてご紹介します。

出張展示でみなさまのお近くに

これからみなさまのお近くの図書館や区民センターでの出張展示で、お目にかかる機会もあるかもしれません。是非、自分だけの「心のお薬」を受け取ってみてくださいね。

いつでも・どこでも・だれでも参加できる！

世田谷文学館は、「いつでも・どこでも・だれでも参加できる博物館」をコンセプトに、これからもさまざまな形で文学に親しむきっかけづくりを提案してまいります。



6人の「処方作家」にたどり着きます。

2019年度 コレクション展前期

仁木悦子の肖像

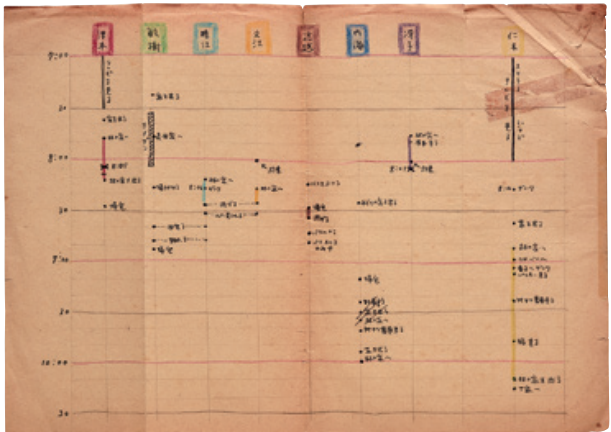
2019年4月20日(土)～9月23日(月・祝)
1階展示室



①



②



④



⑧

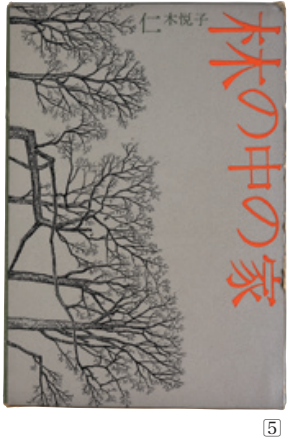
推理作家の仁木悦子（1928―86）は、10代より親しんだ世田谷の地で生涯を過ごしました。1957年に江戸川乱歩賞を受賞した長編『猫は知っていた』で一躍人気作家となった仁木ですが、実は本名の大井三重子名義で作品を発表する童話作家でもありました。

日本のアガサ・クリスティーと評され、平明な文体を特徴とする仁木作品は、彼女の出発点である児童文学の世界で培われた経験を土台としています。また、幼少期に胸椎カリエスを患い、寝たきりになった不自由な体と向き合う仁木の姿は、現実の社会を必死に生きる人間の根源的な強さを私たちに教えてくれるようです。

当館所蔵の仁木悦子関連資料は、過去2回にわたり世田谷区に寄贈された資料で構成されるコレクションです。夫で歌人・翻訳家の故・後藤安彦氏より2002年にご寄贈いただいた約150点、更に2018年度に二日市可代氏よりご寄贈賜りました約500点加わり、童話作家・大井三重子の歩みも目にする事ができるようになりました。



③



⑤



⑥



⑦

- ① 仁木悦子
- ② 草稿断片「猫は知っていた」
- ③ 仁木悦子『猫は知っていた』1957年 大日本雄弁会講談社／装幀：伊藤明
- ④ 創作プロット「林の中の家」
- ⑤ 仁木悦子『林の中の家』1959年 講談社／装幀：真鍋博
- ⑥ 原稿「水曜日のクルト」
- ⑦ 大井三重子『水曜日のクルト』1961年 東都書房／装幀・挿絵：鈴木義治
- ⑧ スケッチブック 1943年



写真協力: 石森プロ

展示構成

第1章 ヒーローズコレクション(仮面ライダー)
―特撮作品原作者として―

第2章 ボクの萬画(サイボーグ009・JUN)
―萬画家・詩人芸術家として―

第3章 石ノ森章太郎による石森章太郎(トキワ荘・シーゼッター海斗)
―萬画家・社会企業家として―

観覧料:

一般 800(640)円
高校・大学生、65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下 無料
※()内は20名以上の団体料金
※4月20日(土)は開館記念無料観覧日
※4月26日(金)は65歳以上無料
※6月1日(土)は地域催事に伴う無料観覧日

【関連イベント】

① サイボーグ009記念スタンプ

4月20日(土)～6月30日(日)

会期中、サイボーグ009のメンバーたちが皆様をお出迎えします。

クイズを解きながら、文学館を探検しよう!

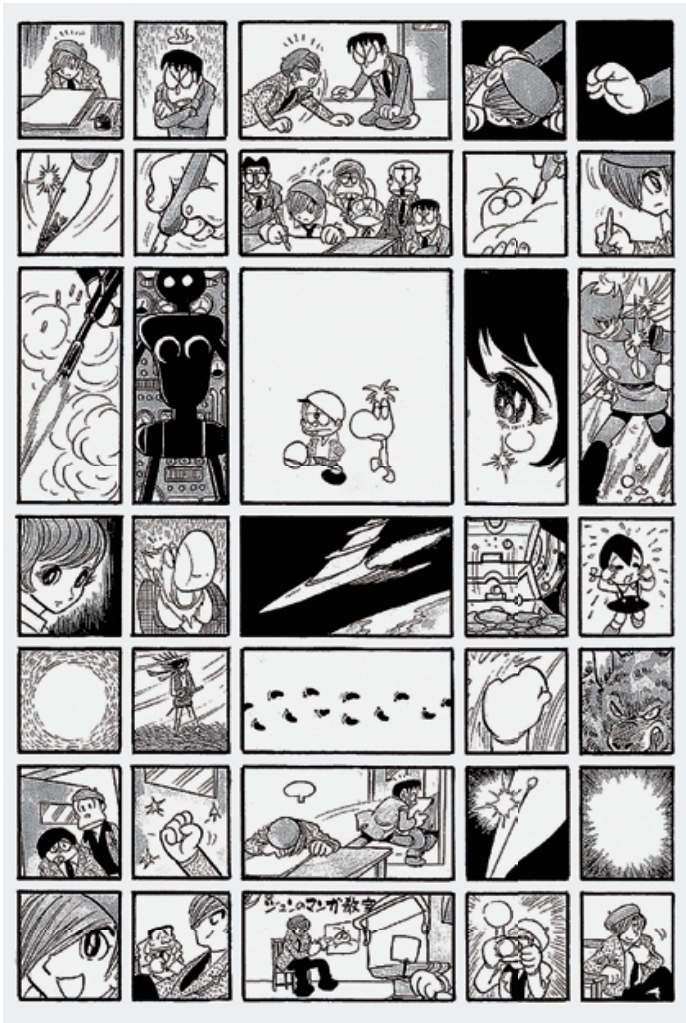
参加費: 無料

申込方法: 当日、直接会場にお越しください。

② セタブンマーケット+烏山下町まつり

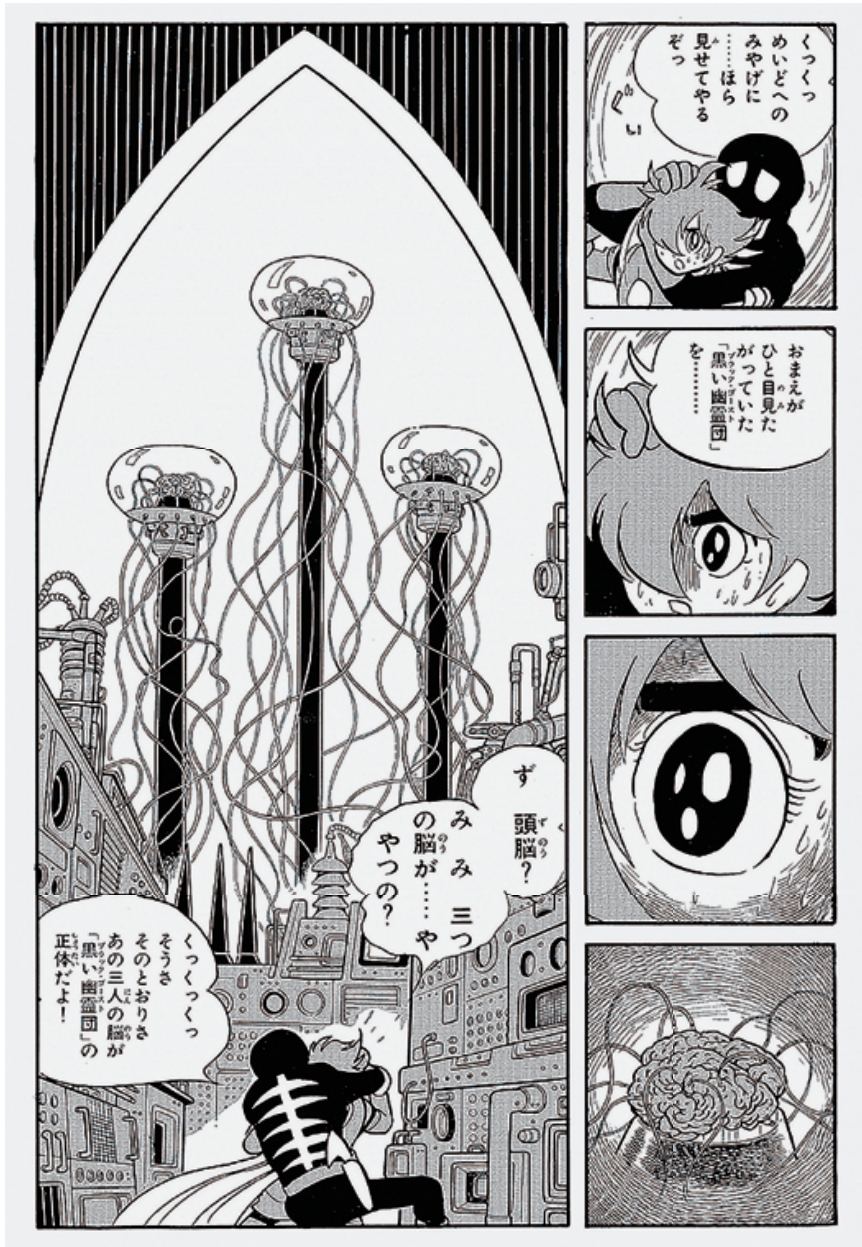
6月1日(土) 10:00～16:00

思春期を宮城県で過ごした章太郎にちなみ、石巻のグルメをお届けします。セレクト書店、ワークショップなどを開催するミニマーケットをお楽しみください。その他、詳細は文学館ホームページをご覧ください。



『章太郎のファンタジーワールド ジュン』

©石森プロ



『サイボーグ009 地下帝国“ヨミ”編』

©石森プロ

企画展

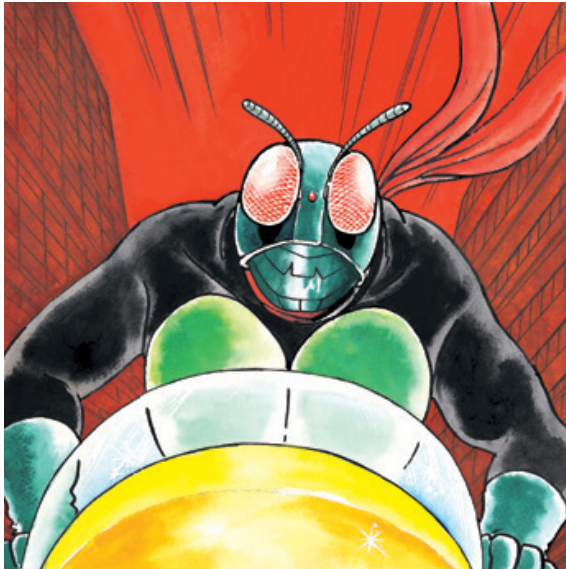
萬画家・石ノ森章太郎展 ボクは、ダ・ビンチになりたかった

マンガ家として『サイボーグ009』『仮面ライダー』『佐武と市捕物控』など数々のヒット作で知られる石ノ森章太郎(1938-1998)は、エンターテインメント作品を量産する一方で実験的作品『章太郎のファンタジーワールド ジュン』や『マンガ日本経済入門』など画期的なテーマにもチャレンジし続け、万物を表現できるメディアとしての「萬画」を提唱しました。また、後進育成のための、マンガ入門書やエッセイ刊行の他、晩年は郷里貢献活動として「マンガを活かした街づくり」に尽力するなど、教育者や作家、社会企業家(社会

変革の担い手)としての側面も併せ持ちます。石ノ森の「萬画宣言」は当初、「カルチャーに依存した、サブカルチャーとしての漫画」からの脱却でした。漫画は、コマ絵と呼ばれる1枚のスケッチから、手塚治虫らの活動を経て、絵画や映画と同じ芸術の一分野となりました。そして石ノ森は、手塚の歩んだ道を引き継ぎ、マンガをあらゆる事象「森羅萬象」を表現できるマルチメディアとしての「萬画」へと進化させたのです。彼の遺業の総体を振り返る時「萬画」は教育や文化・社会現象など、人の営み全てに関わりながら拡がりをみせ

る萬画家・石ノ森章太郎の人生観そのものです。現在、未完であつた代表作品『サイボーグ009』は、彼の意志を継ぐ者により完結され、また東日本大震災で被災した郷里では、石ノ森作品に励まされた人々が震災復興に奮闘しているのです。「萬画」は、石ノ森没後もその可能性を拡げながら「希望の光」として私たちの心を照らし続けています。本展は「世界一多作なマンガ家」の多様性、先見性を顕彰するものです。

4月20日(土)～6月30日(日) 2階展示室



『仮面ライダー』

©石森プロ

資料受贈報告

2018年10月11日～2019年1月30日

▼石井耕様 入口紀男様 佐藤清美様 松寿敬様 鈴木基紀様 林桂様 三田洋様

▼志賀直吉様 志賀直哉著作権管理代表者志賀道哉様

▼尼崎芸術文化協会 荒川ふると文化館 市川市文学ミュージアム 一茶記念館 井上靖記念文化財団 愛媛県立生涯学習センター愛媛人物博物館 大岡信研究会 大田区立郷土博物館 偕成社 鼎書房 神奈川近代文学館 神奈川県立近代美術館 紙の博物館 菊池寛記念館 久留米市美術館 現代文学史研究所 鮎燈社 国文学研究資料館 国民みらい出版 国立新美術館 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木信綱研究会 薩摩川内市川内まごころ文学館 資生堂企業文化部 四季派学会 祥伝社 杉並区立郷土博物館 鈴鹿市文化スポーツ課 セとうち文学叢書刊行会 せんがわまちニイ情報セン

ター 大日本図書 高遠書房 たましん歴史・美術館 茅野市美術館 中央区立郷土天文館 沖積舎 東京子ども図書館 徳島県立文学書道館 日本歌人クラブ 日本児童ベンクラブ 沼津市芹沢治良記念館 姫路文学館 福岡市文学館 藤沢周平記念館 松本清張記念館 三浦綾子記念文学館 武者小路実篤記念館 社会福祉法人めぐはうす 与謝野晶子倶楽部 吉村昭記念文学館 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 早稲田大学会津八木記念博物館

▼「海」「海紅」「街道」「風」「カプリチオ」「経堂雑記」「空想カフェ」「くさくさ」「九品仏川柳句会会報」「群系」「原型富山」「鴻」「香蘭」「心の花」「山暦」「鹿首」「春耕」「抒情文芸」「川柳研究」「双鷲」「タクラマカン」「蠟」「短歌人」「地中海」「飛火」「白」「ブチ★モンド」「文章歩道」「焰」「本のParking」「窓」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」 (五十音順・団体名敬称略)

コレクション検索システムを準備中です!

当館収蔵品の中から特徴あるコレクションについてお調べいただける検索システムを、2019年度中に開始する予定で、準備を進めております。ご利用は当館ホームページから行っていたいただけます。

ご紹介するコレクションは順次増やして参りますが、第一弾は「森鷗外家族資料」を予定しています。こちらのコレクション目録冊子「父からの贈りもの―森鷗外と娘たち 世田谷文学館資料目録Ⅱ 森鷗外家族資料」(2010年刊)は頒布終了したため、再版のご要望を多くいただいております。今後はコレクション検索をご利用いただくことで貴重な資料の数々をご紹介できる運びとなりました。ご活用をお待ちしています。



コレクション検索ページ(イメージ)

小松左京 展(仮題)

10月12日(土)～12月22日(日)



小松左京

「SFとは文学の中の文学である。
そして、SFとは希望である」

(小松左京『SF魂』)

『復活の日』『果しなき流れの果に』『日本沈没』『首都消失』ほか、圧倒的なスケールで描いたSF大作の数々で、絶大な支持を得ている小松左京(1931-2011)。作品は、徹底した取材・調査と膨大な知識・想像力によってつくられ、その迫力と高いエンターテインメント性に読者は魅了され続けてきました。しかも作品に描かれている地球規模で起こる災害や世界の変化が、今、現実として我々の目の前にあらわれていることも、驚異的と言わざるを得ません。これらを生み出した小松左京とは、いったい何者なのか。本展は多彩な資料をもとに、〈小松左京〉という壮大な〈宇宙〉に挑みます。



『日本沈没』創作メモ



『日本沈没』小学館文庫

観覧料：
一般 800(640)円
高校・大学生、65歳以上 600(480)円
中学生以下 300(240)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
*()内は20名以上の団体料金
*10月18日(金)は65歳以上無料

第38回
世田谷の書展
世田谷ゆかりの作家たち

2020年1月5日(日)～1月12日(日)

観覧無料(会場:1階文学サロン)



ようこそ歌舞伎の国へ
六世 中村歌右衛門 展(仮題)

2020年1月18日(土)～4月5日(日)



「京鹿子娘道成寺」白拍子花子
撮影:吉田千秋 ©松竹株式会社

世田谷・岡本の地を終の棲家とした人間国宝、六代目・中村歌右衛門(1917-2001)。「時代を代表する俳優」(評・三島由紀夫)として年齢に応じて“まことの花”を咲かせ、昭和から平成にかけて歌舞伎界を名実共にリードしました。「京鹿子娘道成寺」「隅田川」「伽羅先代萩」「助六由縁江戸桜」など、当たり役と言われた名作とともにその役作りを紹介、日本のみならず世界も魅了した女形の人と芸に迫ります。

世界の眼が東京に注がれる2020年の幕開け、世田谷文学館は初めて日本の古典、伝統芸能のジャンルにチャレンジします。伝統に倣い、伝統を超えたひとりの名優の生涯を通して、歌舞伎の国ニッポンの豊かな美と文化をお伝えいたします。



前田青邨 六世中村歌右衛門「助六由縁江戸桜」揚巻の打掛 白地精好梅図
世田谷美術館蔵

撮影:上野則宏

観覧料:一般 800(640)円
高校・大学生、65歳以上 600(480)円
中学生以下 300(240)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
*()内は20名以上の団体料金
*1月25日(金)は65歳以上無料

萬画家・石ノ森章太郎展
ボクは、ダ・ビンチになりたかった

4月20日(土)～6月30日(日)

観覧料：
12頁を
ご覧ください。



『サイボーグ009 暗殺者編』原稿

©石森プロ



『サイボーグ009 海底ピラミッド編 総集編』

©石森プロ

原田治 展
「かわいい」の発見

7月13日(土)～9月23日(月・祝)

観覧料：
一般 800(640)円
高校・大学生、65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下 無料
*()内は20名以上の団体料金
*7月19日(金)は65歳以上無料
*9月16日(月・祝)は60歳以上無料

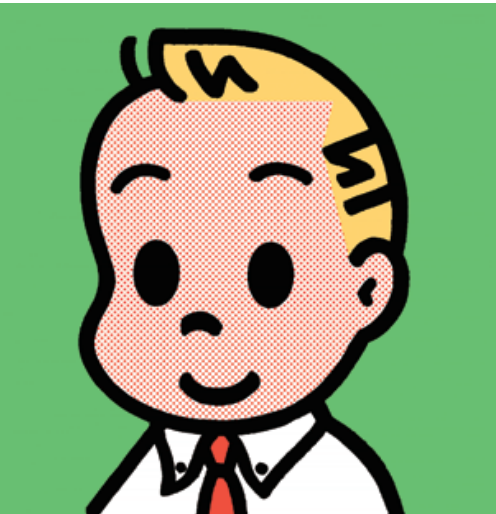
OSAMU GOODSよ永遠に

1970年代後半から90年代にかけて、女子中高生を中心に爆発的な人気を博した「オサムグッズ」の生みの親、原田治(1946-2016)。

50-60年代のアメリカのコミックやTVアニメ、ポップアートなどから影響を受けたイラストレーション—とりわけ、簡潔な描線と爽やかな色彩で描かれたキャラクターたちは、その後

の日本の“かわいい”文化に多大な影響を与えました。

没後初の全国巡回展となる本展では、イラストレーターとして活動する端緒となった、1970年代「anan」の仕事をはじめとして、広告・出版・各種グッズなど多分野にわたる作品を中心に、幼少期～20代前半の初期資料や、エッセイ集『ぼくの美術帖』関連資料も交えて展示し、時代を超えて愛される、原田治の全貌に迫ります。



© Osamu Harada / Koji Honpo

「anan」第47号(平凡出版、1972年)表紙
アートディレクション:堀内誠一
背景イラストレーション:原田治



企画展

萬画家・石・森章太郎展
ボクは、ダ・ビンチになりたかった4月20日(土)～6月30日(日)
2階展示室

観覧料:

一般 800(640)円

高校・大学生・65歳以上 600(480)円

障害者手帳をお持ちの方 400(320)円

中学生以下無料

*()内は20名以上の団体割引料金

* 4月20日(土)は開館記念無料観覧日

* 4月26日(金)は65歳以上無料

* 6月1日(土)は地域祭事に伴い

全館観覧無料日



『人造人間キカイダー』

©石森プロ

原田治 展
「かわいい」の発見7月13日(土)～9月23日(月・祝)
2階展示室

観覧料:

一般 800(640)円

高校・大学生・65歳以上 600(480)円

障害者手帳をお持ちの方 400(320)円

中学生以下 無料

*()内は20名以上の団体料金

* 7月19日(金)は65歳以上無料



© Osamu Harada/Koji Honpo

企画展

萬画家・石・森章太郎展 ボクは、ダ・ビンチになりたかった 4月20日(土)～6月30日(日)

原田治 展 「かわいい」の発見
7月13日(土)～9月23日(月・祝)

4月

5月

6月

7月

コレクション展

仁木悦子の肖像 4月20日(土)～9月23日(月・祝)

コレクション展

仁木悦子の肖像

4月20日(土)～9月23日(月・祝)
1階展示室

観覧料:

一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生・65歳以上、

障害者手帳をお持ちの方

100(80)円

*()内は20名以上の

団体料金

*土・日・祝日は

小・中学生無料

*4月20日(土)は

開館記念無料観覧日

*6月1日(土)は地域祭事に

伴い全館無料観覧日

*4月26日(金)、

7月19日(金)は

65歳以上無料

仁木悦子

せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

●田沼武能写真展

東京わが残像 1948-1964

開催中～4月14日(日)

●ある編集者のユートピア

小野二郎:ウィリアム・モリス、晶文社、

高山建築学校

4月27日(土)～6月23日(日)

■世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

●草屋根と絵筆

向井潤吉のエッセイとともに

開催中～10月6日(日)

■世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

●清川泰次

具象から抽象へのあゆみ

開催中～10月6日(日)

■世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

●宮本三郎 花々と、女たちと

開催中～10月6日(日)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1515 チケットセンター]

●『MANSAI 〇 解体新書 その式拾九』

「発酵」～ジャパニカルチャーという

アカルチュレーション

文化変容～

5月15日(水) 19時

世田谷パブリックシアター

出演:野村萬斎 上野隆博 山田文彦

●世田谷パブリックシアター+

KERA・MAP #009『キネマと恋人』

6月8日(土)～6月23日(日)

世田谷パブリックシアター

台本・演出:ケラリーノ・サンドロヴィッチ

出演:妻夫木聡 緒川たまき ともさかりえ

ほか

■世田谷文化生活情報センター

生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

●世田谷線にのって展

4月27日(土)～5月26日(日)

生活工房ギャラリー

●プライベート・コレクション展

6月15日(土)～7月15日(月・祝)

生活工房ギャラリー

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●岡田知之のパーカッションアンサンブル

～知られざる打楽器の

ルーツとリズム～

4月21日(日) 15時30分開演

成城ホール

●こども向け企画!

岡田知之のパーカッションアンサンブル

～こどもからおとなまで、

楽しい打楽器の世界～

4月21日(日) 11時～12時

成城ホール

開館時間:10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

休館日:毎週月曜日(月曜日が祝日の場合には開館し

翌平日休館/4月23日～5月6日は開館)



交通案内:京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分

小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅)利用

「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>